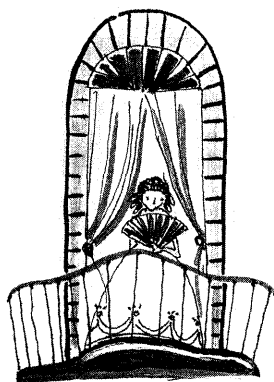


『グリム童話——子どもに聞かせてよいか?』

野村 滋 著 (筑摩書房)

寺崎 弘昭



夏の木蔭で読む本には、どういうものがふさわしいのでしょうか。スラスラと読めて一日で読み終わってしまうというのも、夏の暑さを忘れる消夏法としてはいいのですが、ジリジリとした夏の暑さを木蔭で楽しむにはちょっと勿体ない気がします。かといって、あまりに難しい本を相手にするというのも、居眠りしながら想像力を羽ばたかせ夏を楽しむにはもってこいですが、そんなに木蔭の読書を楽しむ日数のとれそうもない状況では結局何ページも読まないうちに秋の声を聞くはめになりそうです。

そのてん、本書は最適です。ドイツ文学者である著者の長年の蓄積に裏づけられたこの本は、その知見を

基礎にわたしたちが安心して連想ゲームを楽しむことができるものですし、いちおうわたしたちにお馴染みだと思われている『グリム童話』というこの本の素材は、平易な語り口とバランスのとれた先行研究の紹介とにのせてわたしたちを夢見心地にさせてくれるにじゅうぶんです。それでなくてもわたしのばあい連想に走りがちな本の読み方しかなできないのですが、そのわたしが安心して連想に身を任せられかつ七日間で読み終えることができたのですから、夏の木蔭の読書用としてはまさにお勧め品というわけです。

わたしたちにお馴染みだと思われる『グリム童話』も、意外に一筋縄ではいかない代物のようです。

たとえば、『白雪姫』。どうもわたしたちは、「お子さま向け」に改作された『白雪姫』を聞いたり見たりしてきたものようです。ちょうど、「お子さま向け」の『ロビンソン・クルーソー』や「お子さま向け」の『ガリバー旅行記』ですましてきたように。

たとえば、『白雪姫』の後は狩人に白雪姫を殺して肺と肝をもってくるよう命じています。そして、狩人がもって帰った肺と肝を、猪のそれだとも知らず、塩ゆでにしてペロリと食べてしまっているのです。また、後は三度も——一度目は絹紐をもって二度目は毒櫛をもって三度目は例の毒林檎をもって——白雪姫の命を狙っています。そして話の結末は、こうです。

婚礼の式にかけて、ほかでもない、白雪姫をみた。後は、その場に、立ちすくんだ。このときはいく、鉄の靴が炭火にのせられていた。つづいて、まっ赤に焼けた鉄の靴が、やっ、とこでは喜んで、はこばれてきた。後はその靴をはいて、ピョンピョン跳ねつづけなくてはならなかった。最期に息が絶え

て、ドタリと倒れた。(池内紀訳、ちくま文庫)

なんと後は、王子と白雪姫の結婚式にまで駆けつけて、そこでまっ赤に焼けた鉄の靴を履かされて息絶えていたのです。しかも、一八一二年の『グリム童話』初版ではその後は継母ではなく実母だったのです。

このように「残酷」な話なのですから、「子どもに聞かせてよいか」という疑問が生じてくるのも当然でしょうし、デイズニーランドの世界にはふさわしくないと大胆にカットされたのも当然でしょう。しかし、著者・野村先生はこうしたデイズニーランドの対応には反対です。言語学者であり民俗学者であったグリム兄弟が採集した昔噺『グリム童話』は、(へ加害／欠如)とその除去という物語の骨太な構図に満ちています。それはいわば傷つけられた全体性の癒しの儀式の物語なのであって、噺の中に中世的な刑罰の諸相が現れてくるのも、昔噺が中世の土壌のなかで醗酵したものであることはさておいても中世的刑罰が傷つけられた共同体の癒しの儀式としてあったことと相即的であ

るように思えます。だからなおさら、〈加害／欠如〉が線の細いものになってしまうと物語の治癒の儀礼としての意味は薄くなってしまうのです。

「残酷な母」というのは「古いものにしがみついている綱を断ち切って、発展を促す役目を引き受けているのです」、と著者は言います。それは、「生成力の擬人化」されたものなのです。その意味では、『グリム童話』は子・娘の自立の物語であり（たとえば『ヘンゼルとグレーテル』）、子の親離れを促す酵素に満ちていると言えましょう。

子どもたちは、心の中の自立劇を昔噺の中で具体的にしかしフィクションとして演じることができるので。こうした自立劇はもちろん、離乳期などにも生じています。しかし、物語としては最もドラマスティックにみえる時期が設定されるのが常です。じっさい、七歳で森に連れて行かれた『白雪姫』は早い方として、十五歳のとき百年の眠りに陥る『いばら姫』にみられ

るように十二〜十五歳に危機が設定されるものが多いようです。日本でも、「七歳までは神のうち」と言われ七歳というのは「子ども」の始まりと考えられています。十二〜十五歳といえは娘宿・若衆宿に入ります。年齢です。

つまり、『グリム童話』はファン・ヘネップのいわゆる『通過儀礼』（弘文堂）の物語なのです。もう少し限定して言えば、それは、人類学者ターナーが『儀礼の過程』（思索社）で分析しているライフ・クライシス儀礼の物語なのです。古い世界から新しい世界に渡る際に生じるコミュニケーション（これをターナーはファン・ヘネップが命名したりミネール儀礼に対応する仮構的世界の意で用いています）こそが『グリム童話』の世界なのです。その意味で『グリム童話』は、まさに『子どものためのメルヒェン』だといえるのでしよう。

野村先生の以上のような『グリム童話』理解は、じっさいに千葉県松戸市の「おはなしキャラバン」の

実践で実践的に論証されたことを、わたしたちは浜島代志子さんの『昔ばなしは今ばなし』（大月書店・国民文庫）によって知ることができます。浜島さんたちは『白雪姫』を本来のかたちにもどして、つまり実の母である后が肺と肝を食い三度も命を狙い挙句にまっ赤に焼けた鉄の靴を履かされて息絶える、というストーリーを復元して人形劇に仕上げました。子どもたちとの対話もはさんだ演出ともあいまって、子どもたちのめりこみぶりが相当であることがよくわかります。『グリム童話』を「お子様向け」にする必要なぞ決してなかったのです。

さらに浜島さんたちのいわば昔噺を実践的に読む試みは、意外なことまで明るみに出すことに成功しました。子どもたちと一緒に参加している親・大人たちが意外にも後に感情移入して観劇していたのです。この成果は、浜島さんが鏡の精を実際に出現させて、鏡がもう一人の後自身であることを強調したことで、若さへの執着（白雪姫の肺と肝を食べようとする）がそ

の執着を象徴的に表現しています）から解放されまた子離れを達成するプロセスで苦悩する後の姿がクロウズ・アップされたことによるものだと思えます。

ともあれ、『白雪姫』は子どものためのメルヒェンというだけではなく、大人のためのメルヒェンでもあったわけです。后もまた、まっ赤に焼けた鉄の靴を履くことによって、彼女のライフ・クライシスを渡るのです。まさに、『グリム童話』はその原題どおり『子どもと家庭のためのメルヒェン』だったのです。考えてみれば当然かもしれません。かつて昔噺は炉辺の語りだったのであり、大人も子どもも参入するものでした。そして今ふたたび、『グリム童話』が語られ演じられるただ中に、大人と子どもがそれぞれに参入しそこにコミュニケーションがたち現れようとしているようです。

（お茶の水女子大学）